
卓球少女

希鈴レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卓球少女

【Nコード】

N3209W

【作者名】

希鈴レッド

【あらすじ】

高校二年生になる清水悠斗は、突然女子中学二年生の野宮美雪に部活存続のためにコーチを頼まれる。そして悠斗は、女子卓球部に訪れると、美雪をあわせた六人の卓球部がいた。これから悠斗はこの六人の少女たちとともに夏季大会を目指して日々を過ごしていく。

第1話「始まりの軌跡」

春休み、俺　清水悠斗しみずゆうとは、数日で高校二年生になる。勉強とかも大変になっていくことだろう。将来も決まっていけないというのに……このまま学年が上がってもいいのだろうか……。

赤点は取らないが、テストはだいたい平均以下だし、実技もだいたいダメなんだよな……。けど、一つだけ才能と言えば才能というもある。

それは、子供の頃からやっている卓球だ。上手い方だとは思う。中学校の時は部長になり、みんなを全国まで行かせたことがある。日本一にはなっていないけど。

けど、体育はダメなんだよね、俺って。

話を戻すけど、春休み。俺はこの選択で良かったのか今は悩んでいる。普通の高校生活だと思っていたが、まさかこうなるとは予想もしていなかった。

春休みに入って、市民総合体育館で俺はただ適当に相手探して卓球をやるうとしていたら、中学生くらいの女の子が複数の男子に囲まれていじめられているではないか。

「なんでそんな根暗で地味なやつやってるんだよお」

「そうだけ！　俺たちとバスケやるうぜ！」

「い、いいもん！　卓球をバカにする人たちとなんか、スポーツしないもん！」

同意だ。俺もしたくない。だから俺は止めに入り、男子たちを追い払った。

「大丈夫か？」

と俺は女子中学生に言う。

「は、はい。ありがとうございます」

「そうだ。今日は相手がいないから、卓球一緒にやらないか？」

「は、はい！ 私も困っていたんです！」

「だろうな。周りは誰もいないし、男子たちにいじめられてたしな。」

「よし、やろう！」

「それで、その女子中学生と卓球をする。」

「！」

「やっっている途中に女子中学生の手が止まる。」

「あなたは……」

「……？」

「意味が分からなかった。どっかで会ったことあったっけ？」

「あの……経験者ですよ？」

「ああ、それに気付いたってわけか。びっくりしたよ。」

「そうだけど？」

「あの、お願いです！ 私の学校の卓球部を助けてくれますか？」

「え？」

「急なお願いだった。だから、ついオーケーしてしまった。」

少女の名前は、野宮美雪^{のみやみゆき}。大学や高校も付属である、姫原女子中学校出身だ。そう、女子校だ。

男の俺が女子中学生の卓球部を存続させるように、コーチを頼んでいるのだ。どうやら、顧問の先生はいなくなったらしく、部員は今も彼女一人らしい。もう廃部になりそうだったが、次の新一年生が入部してきて、夏期大会で一勝でもすれば大丈夫になるらしい。

だから、一年生が入り次第コーチをしてもらいたいということだ。

さて、これから一体どうなっていくのだろうか。

第2話「女子卓球部のコーチに」

五月になる。この中学校はこの月から部活に一年生を入れるようだ。だから一年生が入ってから、俺はこの女子校に呼び出された。校門に行くとともに冷たい視線を女子生徒たちから受ける。はっきり言うつもりはない！でも、困っているなら助けてあげないといけない。

「あ、清水さん！」

体操着に着替えている野宮さんが来てくれた。助かった。僕は清水さんに案内される。

姫原女子校はとても大きく、きれいだった。小学生も中学生も高校生も制服だ。大学生も制服を着ている。着るところもあるんだな……。

「先に入部したばかりたちの子が待ってます」

「そ、そっか。何人入ったんだ？」

「五人入りました」

へえ。それなら部員も六人になって、夏季大会の団体戦に出場できるな。

「こちらです」

当たり前だが、案内された場所は体育館だった。俺は扉を開ける。すると、

「きゃああつ！」

「なっ！」

いきなりの悲鳴に俺も声をあげそうになった。なぜこんなにびっくりされたのだろうか。……と思ってる場合じゃない。

「え、えつと……」

なんて言えはいいだろうか……。

「コーチの人？」

黄色い髪の少女が言う。あれ？ 同じ顔が二人も……双子が入部

してきたのだろうか。いや、そうなのだろう。

もう三人も特徴があるのだろうか。

眼鏡をかけてもじもじしている薄い緑の髪の子。俺をみて睨んだ感じの顔をしている、いかにもツンツンしている黒髪のロングヘアの少女。まっすぐな気持ちが見て分かる赤い髪のショートカットの少女。

「この人はこれからコーチとして教えていただく、清水悠斗さんです！」

茶色の髪的美雪がニコニコして紹介する。

「ど、どうも……」

つい照れくさくなってしまふ。女の子しかいないからだろうか。

「よろしくおねがいします！」

赤い髪の少女が元氣よく挨拶してくれる。

「うん。よ、よろしく」

さあ、これから一体どうなっていくのだろうか。

えっと、赤い髪の少女の名前が、いしくんしお右黒栞。ツンツンしてる少女は、

もりかわあおい森川葵。

眼鏡つ子な少女は、たしまかなこ田島夏奈子。双子の少女は見わけがつかない……。

黄色の髪を右か左に結んでいるから、それでみんな判断しているようだ。右に結んでいるのが姉で、さとうまみ佐藤真美とゆみ友美。

全員、卓球初心者だそうだ。石黒さんのやる気は初心者だったからなようだ。

一から教えるって言うてもどこから教えればいいか分からないんだが……。

まあ、なんとかなるだろうとは思っ。

とりあえず一日目は自己紹介で終えた。この調子で存続とかやっていけるのか？ 今回は考えてない俺のせいでもあるけど。

第3話「練習開始？」

さあ、俺は今から姫原女子校へ行かなければならない。家からなら割と近いが、高校から行くと結構遠い。急いで行かなければならない。バス停へ急ぐ。

「どこ行くの？」

「え？」

振り向くとそこには中学校からの友達の、咲花梨香と、小学校からの親友の桜庭圭一郎さくらばけいいちろうがいた。二人と僕は同じ卓球のクラブに入っ
て練習したりする。けど、こんなときに何の用事が……。

「まさか、彼女探しか？ 寂しいもんなお前」

別に寂しくなんかないし。圭一郎がからかってくる。

「これから急ぎの用事があるんだ！ じゃあな！」

俺はそう言い残してバスに乗った。

「こらあ！ 悠斗ったら！」

なんか梨香が怒っているが気にしない。とりあえず向かわないと
な。

なんとか部活の時間に間にあつた。

「あ、悠斗さん！」

声をかけられた。赤い髪を揺らしながら、栞が近寄ってきた。

「これから向かうのか？」

「はい！ 今日もよろしくお願いします！」

そう言っ
て体育館の方まで走り去った。元気だなあ。昨日はなんにも教えられていないのに、いい子だな。

みんなもう準備が整っているようだ。ラケットまで持ってる。

「さあ、早くう！」

友美が相当元気だ。そんなに教えてもらいたいのだろうか。何か
ら教えた方がいいだろうか。

「と、とりあえず前傾姿勢をしてみようか」

「ぜんけーしせー？」

真美と友美がそろえていった。

「じゃあやってみせるよ」

俺は足の幅を大きく開いてみせる。

「え、ええっ!？」

俺から距離をとっている夏奈子が顔を真っ赤にして叫ぶ。嫌なの
だろうか。

「肩幅ぐらいいに開くのが理想かな。それで、かかるとに重心をかけず、
つま先の方に体重を」

「女の子に体重とか言う男はサイテーね。消えればいいのに」

なんか傷ついた。毒舌すぎるよ、葵……。消えればいいとか相当
効くよ……。

「葵ちゃん！ そんなこといつちやだめだよ」

「せ、先輩がそういうなら……」

美雪が助けてくれる。感謝します。

とりあえずみんなやってくれているが、これからは仲良くしてい
けるかが心配になってきたんだが。それにしても、棗がさっきから
黙りっぱなしだ。体が震えている。汗の量も他の子よりも……。前
傾姿勢はきつかったのだろうか。

「ふふふ……」

「ど、どうした？」

「？」

俺とみんなは急に笑い出した棗を見る。

目がマジだ!!

「ふふふふふ！ 早く卓球やりましょ！ 卓球！」

ラケットを大きく振る。暴走し始めたようだ。今までの元気いっ

ぱいのかわいい少女の姿がまるでない。もはや戦闘狂な感じだ。一言で表すと、怖い。

こうして、いろんなことがあって、練習が終わった。

次の日。美雪と真美と友美以外誰も来なかった。怖がられてしまったのだろうか……。

第4話「森川葵」

とりあえず、部活は中止にした。みんなが揃わなければ部活にならない。みんなが強くないと！

「悠斗さん、どこ行くんですか？」

後ろから美雪が追いかけてくる。

「みんなを集めないよ。こんなばらばらだと試合も練習もできないよ。俺はコーチとしてみんなを集めないよ」

「そう……ですか」

うつむく美雪に俺は肩に手を置く。

「気にするな。みんなと仲良くなれるよう俺は頑張るから。じゃあな！」

俺は美雪に踵を返してみんなを探す。けど、どうやって見つけようか……。校内に入るわけにはいかないし……。

一応校門に来た。帰っていないだろうか。外に出て辺りを見回す。

「……いた！」

長い黒の髪、今日はツイントールをしている森川葵だ。なんか苦手だが、部活に参加してと頼むしかない。

「葵！」

俺はすぐに傍に行った。

黒かばんを両手に持ちながらこちらを向く。

「何か用？」

どうしてこんな冷たく言い放つんだろう。そんなに俺が嫌なのだろうか。

「今日は部活だろ？ 来ないのか？」

「いいじゃない、別に。あたしの勝手でしょ？」

そう言って葵はまた足を進める。

「ま、待てよ！」

「ついてこないで！」

ものすごく嫌われてるんだな、俺って……。

「まだ来るの!？」

人ごみの多い商店街で葵が俺につつかかってきた。

「部活に來いって言いに来ただけだから」

「それにしても長いストーリーキングね」

言われなくなかった。俺も何となくそう思っていた。悪いことだ
ってことは。

「め、迷惑だったならごめん。でも、部活を存続させたいんだ!

君たちの卓球部を!」

俺の言葉に葵は目をみはる。

「それだけ?」

「それだけってなんだよ! 俺は女子卓球部を みんなを守りた
いから来てやったんだ。他に理由は無い」

つい叫んで言ってしまった。周りの人が視線を向ける。しまった
な……。

「も、もう! 迷惑よ!」

葵は顔を真っ赤にして走り出した。十字路でキョロキョロ見まわ
して適当な店に入っていくようだ。入った店が……ゲーセン!?

「って、あのゲーセンはまずい。一人の女の子を入れるわけには…
…」

俺も葵が入ったゲーセンに入る。

どこにいるんだ? ここは不良な奴らがこの時間にはけっこうい
るんだよな。ユーフォーキャッチャーのところにもいない。ガチャ
ガチャのところにもいない。ん? あの階段付近に……。

いた! やっぱり葵だ! 男三人に囲まれている。葵は涙目にな
って怖がってる。助けてあげないと。

「葵ー！！」

男たちの間に入り、葵の手を握る。

「ふ、ふえっ！？」

葵は驚いている様子だ。だが今は気にしない。

「なんだよ、お前！」

不良男子が俺に話しかけてきた。

「お、俺はこいつの彼氏ですよ、はい！ さあ行くぞ、葵！」

「ちよっ……！！」

葵の手を引いて、俺はゲーセンを出て、商店街を抜ける。

俺と葵は小さな公園に入ってベンチで休むことにした。空を見上げてみると、もう一番星が出ていて、少し暗くなっていた。

「な………なんで………助けにきたのよ」

息を切らしながら葵は尋ねてきた。

「ほっとけないからにきまつてるだろ。ああやって涙目になって臆病になってる女の子を助けられないなんて、俺はしないぞ」

そういつたら葵は、

「ば、ばっかじゃないの！ 涙目になってなんかなかったし！ あと、助けてなんて頼んでないから！ まあ、あんたはお人よしそうだから来るかなとはちよっと思ったりは、したけど………」

顔を真っ赤にしながらそう言った。涙目になったところを見られて恥ずかしかつたんだらう。俺はつい笑ってしまった。

「何がおかしいのよ！」

ツインテールを揺らして葵がこっちを見る。まだ顔が赤い。

「俺、葵に苦手意識してたけど、なんかもうそんなの無くなったよ。まだ会って間もないのに。意外にかわいいな」

「な、ななな………」

葵は手を上下にぶんぶん振る。

「？」

「な、何言ってるのよ！　そうやって言ってる、部活に来てもらおうなんて思ってるのね！」

別にそういうわけじゃないけど。まあいいか。

「来たくないのなら来なくなっただっていいさ。でも、俺にとってはお前が必要だからさ」

「…………え？」

まあ、分かってくれないだろうけど。また新しいメンバーを探すしかないよな。美雪には悪いことしたなあ。

「じゃあな、葵」

俺は立ち上がって、公園を後にしようとする。

「…………待ちなさいよ！」

いきなり葵に袖をつかまれた。

「な、なんだよ？」

下を向いている葵。なんかもじもじしている。なんか印象が違う。

「別に明日から行ってあげてもいいけど…………」

「ほんとか！」

「勘違いしないでね！　私は美雪先輩に迷惑をかけたくないだけなんだから！　あんたがあたしを必要としてるとか、どうでもいいから……………帰る！……………また明日」

足早で歩く葵。俺のことはどうでもいいのか。まあ美雪に迷惑をかけたくないと思ってくれてるなら嬉しいよ。

「また明日、か…………」

俺も帰ることにした。こっから自分の家は遠いけど。

第5話「佐藤真美と友美」

次の日、葵は来てくれた。

「良かったあ。来てくれて！」

美雪も喜んでくれてる。だけど、栞と夏奈子が来ていない。二日連続で休むとは少し予想はしていたが、現実になるとは。

「たつきゅーやろうよお」

真美と友美がそろえて俺に言ってくる。

「わかったよ。とりあえず素振りをやろう」

「はい！」

二人は元気よく返事をする。やる気があっていいな。

とりあえず最初はフォアで素振りをさせる。表で三角形を描くように振れと教えた。斜め上、下、腰辺りに動かす。……うーん。美雪と友美は結構上手いな。美雪は分かるけど、友美は結構才能があるかもな。基本ができてるからな。問題は残り二人だ。真美は適当に振ってるようにしか見えない。ちゃんとやれって言っても、初心者だから仕方ないか。次は葵だ。前傾姿勢をしていない。ラケットを真横に振る。ものすごく悪い見本だ。

「おい、葵。フォアはこうやって振ってくれ。腰辺りから、顔のところにへんまでいってくれ。斜め上に上げるんだ」

俺は手本を見せる。葵はまじまじみてる。

「わかったか？」

尋ねると、葵はなぜか我に返ったかのような顔をする。顔を赤くしてそっぽを向く。

「な、なによ！ わかってるわよ。ただちゃんと指導をしてくれるかどうか見てただけよ」

「おいおい……」

大丈夫なのだろうか、葵は。

「コーチイ！ こんな感じ？」

真美が呼ぶ。

「あ、ああ。さっきより良くなってるぞ！ 上手いじゃないか！」
葵よりすごいな。呑み込みが早い。真美も友美のようにすごくなるだろう。

「……………」

ん？ 友美はさっきまで良かったフォームが少し悪くなったな。

「友美。もうちょっと前傾姿勢に」

「……………」

なんか、不機嫌になってる気が……………。なぜだろう。

「きゅ、休憩にしようか……………」

まだちよつとしかやってないけど、つい休憩にしまった。美雪もなんか不思議そうに俺を見てる。気にしないでくれ……………。

俺が記録をとっている時。

「真美のバカ！ もう、いつもいつも！」

突然友美が叫び、扉に向かって走っていく。

「お、おい友美！」

俺は呼びとめようとしたが、もう外に出ている。結構足が速いんだな。

「一体どうしたんだ？」

俺は真美に尋ねる。

「よく分かんない。コーチに褒められたって言ったたらなんか機嫌が悪くなって出て行っちゃった」

「そうか……………。三人は素振りをしていてくれ！」

「悠斗さんはどうするんですか？」

美雪が尋ねてきた。

「俺は友美を探してくる」

俺は踵を返して、友美を探すことにした。

すぐに見つけた。木の陰でしゃがみこんで泣いていた。

「友美……」

「うっ……うっ……」

返事は無かった。聞こえなかったのだろうか。俺は隣に座って友美の頭を撫でてあげた。友美はビクツとなって、こっちに顔を向けた。目が赤い。

「うっ……」

「何か嫌なことでもあったのか？」

「……」

答えてくれない。何か悔しかったのだろうか。そう言えば真美が。

コーチに褒められたって言ったらなんか機嫌が悪くなって出て行っちゃった。

なるほどな。

「真美に褒めていたのを気にしてたんだな」

泣いてこっちを向きながら友美は頷いた。

「真美は……ひっく、いづも……友美の上に行くから……うっ

……」

そうか。双子で容姿もそっくりなのに、どうしていつも姉ばかり褒められ、上の方にいくのか気にしてたんだな。

「俺が悪かった。お前は初心者とは思えないくらい最初から上手かったから褒めたりするのを忘れてた。まだまだコーチとしては半人前だけど、これからは友美に対しても、経験者の美雪にも褒めていくようにするよ」

「友美が……うまい？」

友美は驚いているようだ。

「ああ。なかなかだった。でも俺が真美の方を先に褒めたせいでバ
ランスが悪くなったた」

「そ、そうだったんだ……真美より上だったんだ……」

圧倒してる感じの顔をしている。そりや今まで真美の方が上と思
ってたからな。驚いて当然だろう。

「友美は卓球の能力が他より秀でてたんだよ。俺は今日、友美を見
てて思ったんだ」

「友美が……うっ……」

あれ！？ 俺なんか悪いこと言ったかな……。泣かしてしまった。

「ご、ごめん」

「うっん……。嬉しくて泣いてるだけだから。ありがとう、コーチ」
目をこすりながら友美は言った。よかった、納得してくれて。

「これからもずっと友美を見てるから。もっと強くなるよう応援し
てるぞ！」

そう言っって俺は撫でてやった。すると突然、友美が俺に抱きつい
てきた。

「コーチは高校二年生だよな？」

「あ、ああ」

な、なんか恥ずかしいな。

「四つしか離れてないから、友美はコーチのこと先輩って呼んでい
い？」

「先輩でもいいさ。どう呼んでくれてもいいから」

「ありがとう、先輩！」

友美は顔をあげてニコニコしている。とても嬉しそうだ。

まだコーチになってから三日目なのに、ここまで仲良くなれたの
は進歩だな。このままみんなと絆を深めて、万全な状態で大会に挑
んでゆきたい。

「さあ、練習の続きやろうぜ！」

「はいー！」

元気よく手を上げる友美。なんかいつも通りだなんて思ってしまった。

「今日の練習はここまでだ」

「はい、ありがとうございました」

四人からそういうお礼を言われる。顧問の人もお礼を言われるとこんな気持ちだったのかな。なんだかくすぐつたい気分だ。

「せんぱーい！ 一緒に帰りましょーよおー！」

「え？ うわっ！」

友美が俺の右腕に抱きついてきた。いきなりすぎて俺は動揺してしまった。わけがわからない。

「先輩は友美の婿なんです！」

そんな話聞いてないんですけど！ …… ってそう言うことじゃなくってだな……。

「友美の婿なら真美の婿だよ！」

次は真美が俺の左腕に抱きつく。

「ちよつと二人とも！ 悠斗から離れなさい！」

そうだ、葵。俺から二人を離して …… 葵は俺の後ろに回り込み抱き付いて俺を引つ張る。それでも助けようとしてくれるのか？

「ゆ、悠斗さんは、渡せません！」

美雪は止めるどころかなぜか張り合いだした。前方から俺の服をつかみ引つ張る。前後左右から引つ張られててすごく痛いんですけど……。

どづつしてこうなったんだ……。

第6話「田島夏奈子（前編）」

土日が過ぎて、二週目に入った。約一週間になったな。コーチになつて。だけどまだまだ女子卓球部がまとまっていな。……と思つていたら。

「二日も来なくてすみません」

「あ、あの……すみませんでした」

「あ、いや。気にしなくても大丈夫さ」

来てくれた。栞と夏奈子が。

「栞ちゃんたちやつと来たあ！」

真美と友美も喜んでいる。

「これでみんなもそろつたし、練習を始めよう！」

「おー！」

「おー！」

真美と友美が手をグーにしてあげる。

「おー！ ガンバルー！」

美雪も元気だ。やっと揃つたつて感じだもんな。

「……おー！」

栞はなんか元気そうじゃない気が……。

「お、おー」

夏奈子は相変わらずもじもじ系だな。かわいらしくていいけど。

今日は卓球台を二台出して、球出し練習をすることにした。とりあえず、ピンポン球をラケットに当てる。とりあえず慣れさせるんだ。

まず、二チームに分かれる。夏奈子と葵と真美のチームと、栞と友美のチームにしてみる。

「じゃあ三人の方は俺が付く。美雪は栞と友美の方に行つてくれ」

「はい！」

よし、俺と美雪は球出しをして、一年のみんなはミスでもいいからラケットでそれを返す。とりあえず最初はそんな感じだな。

「いくぞ！」

「は、はい……きゃっ！」

うーん……。夏奈子はちょっと怖がりすぎだな。尻もちついちゃったよ。

「ううう……」

「だいじょーぶ？ 夏奈子」

「うん」

真美が夏奈子の手を持ってやっている。この調子でどんどん仲良くなってくればな。

「栞ちゃん！」

え？ 栞？

美雪の声が出た方を向くと、栞が座り込んでいる。かなり汗をかいている。まだ全くと言ってもいいほど練習をしていないというのに。

「悠斗さん！ 私、栞ちゃんを保健室へ運びます！」

「あ、ああ」

というわけで、栞と美雪は抜けることになった。それにしても、栞は気分が悪かったのに無理して来てくれたのか。なんか悪いな……。

休憩。みんなは水筒にある飲み物をいっぱい飲む。

「ふいー！ 生き返るなあ！」

友美がそんな一言を漏らす。真美も飲み物を飲んでいる。葵はツインテールを揺らしながらタオルで汗を拭いている。こつちを見てきた。

「何あたしたちを観察してるのよ」

「別にそういうわけじゃないから！」

俺は観察とかしたりしねえから。ただ体調が悪くないか見ていただけ……それは観察とも言えてしまうか。

夏奈子は一人でしゃがみ込んでいる。話しかけてみるか。

「おーい、夏奈子」

「ふえっ！ い、いやぁ！」

え？　なんか悲鳴を叫んでいます。驚いちゃったんですけど。

何にもしてないんですけど。冷たい視線を感じる。この感じ、多分葵だろう。真美友美は睨んでいないと信じておこう……。

美雪は帰ってきた。栞は休ませてあげてるらしい。まあ、体調が悪くないなら仕方ないな。

とりあえず、今日の部活は終了だ。

校門まで来ると、

「せんぱい！」

後ろから友美が来た。

「あれ？　真美は？」

「あとで来ますよぉ！」

「そうか」

やっぱり双子だから一緒に帰るんだな。そうだ、夏奈子について何か知っているのだろうか？

「そっぴや、夏奈子について何か知ってるか？」

「えー。友美以外の女の子の情報を教えるんですかぁ？」

「ど、どういことだよ……」

なんかいじられているんだろうな。友美はすぐに悪戯っぽい笑みをした。

「なんでもないですよ！　夏奈子はクラスが同じになって、卓球部

「なったからお友達になれたとは思いますが！でも先輩には仲良くできないかも」

「なんでだよ？」

俺は怪訝そうに聞いてみた。

「夏奈子は、男嫌いなんですよ。だからこの学校に来たんだって！」

「お、男嫌いだって!？」

こゝこれは大変なことになってきたかもな……。

第7話「田島夏奈子（後編）」

俺は家に戻った。どうすれば男嫌いが治るか考えた。……何か方は無いだろうか。でも、無理に治そうとしてもダメだよな。迷惑だろうし……。

美雪に聞いてみた方がいいだろうか？ 同じ女の子だし。

と考えていたらいつの間にか金曜日になってしまった。栞は来ていない。まだ元気が戻っていないのだろう。夏奈子にも怖がられっぱなしだ。

「で、何か方法はないかな？」

美雪に聞いてみる。

「うーん……」

美雪は腕を組んで考え込む。頼む、何かいい案は無いのか？

「……明日は土曜日ですし、みんな遊びに行くってのはどうでしょう？ そうすればいいんじゃないですか？」

と言ってニコツと笑う。

「あ、遊びに行く、か……」

という流れで土曜日。女子卓球部＋俺で遊園地に来てしまった。

俺は保護者役になるのだろうか、この場合は。余計なことは考えないでおこう。

「遊園地だよ遊園地！ あれから乗ろうよ！」

「ち、ちよつと！ あたしはただ付いてきただけなんだから！ 楽しんでるかと思ってないんだから！」

友美が葵を引っ張ってアトラクションへ向かう。

栞は元気そうで友美についていく。

「早くいきましょー！ 悠斗さん！」

美雪が俺の手を引つ張つてきた。まさか、本当は美雪が楽しめたかったからこんな案を……なわけねえか。

友美と葵、栞がコーヒーカップに乗る。俺と夏奈子と真美と美雪も違うカップに乗る。

「わー！ やるよ！ いくよ！」

「やめなさい友美……きゃあ！」

「は、速いよー！」

動き出した瞬間、友美たちが乗っているカップが高速回転を始めた。友美のやつ、かなり楽しんでるな……。

「次あれに乗りたーい！」

「乗ろうよ、乗ろう！」

友美と真美がみんなを連れていく。

俺と葵と夏奈子は休むことにした。ベンチに座る。もちろん、葵は真ん中で、両サイドに俺と夏奈子がいる。……それにしても、

「なあ、葵」

「なによ？」

「ちよつとだけ、近いんだが……」

「……！ べ、別に近くにいたいからつてわけじゃないから！ あなたがかなりの……め、面積をとってるからじゃないの!？」

なぜか怒られた。葵が顔を赤くしてる。そんなくらいにまで怒るのか……。じゃあ、ちよつと離れた方がいいのかな。

「えつと……。じゃあ葵と夏奈子の分のジュース買ってるから、ちよつと待ってて！」

「えー？ ちよつと……」

「どうした？」

「……なんでもない」

葵はよくわかんないなあ。まあいいか。まあ俺が離れたら葵も気が楽になってくれると思うからいいか。

戻って見たら、葵がいなくなっていた。夏奈子しかいない。葵は他の人とアトラクションに乗りに行ったのだろうか。じゃあこのコースは俺が飲むか。

「はい、これ」

「あ、ありがとうございます」

夏奈子はコースをおそるおそる受け取った。やっぱり怖いのだろう。ベンチに腰を下ろして、俺は夏奈子に言いたいことを伝えることにした。

「あ、あのさ……」

「は、ひゃい！」

いきなりでびっくりして嘔んじやってる。

「俺のこと、怖いよな。俺みたいな男の人に慣れてないんだよな？」

「すみません」

「いやいや。謝ることじゃないから」

誰にだって怖いことはあるさ。俺にだって色々あるから……。

「俺、これからも努力するよ。夏奈子が怖がらないように……。迷惑だったら、あまり近づかずに指導とかするけどさ」

「迷惑なんか……じゃないです」

え？ 夏奈子……。

「まだあまり練習したりしてないですけど、清水さんは優しいってもう分かっています。教え方も上手いし、すごいと思っています。だから慣れようとしています。でも体が怖がっちゃって……」

「そっか……」

夏奈子も自分では努力をしていたんだ……。俺がいるのを分かかってて部活にも来ていたもんな。一週間、夏奈子は頑張っていたんだ。

「……ひゃっ」

俺が夏奈子の肩に手を置いたらびっくりしたようだ。そりゃ当り前か。

「進歩してるじゃないか。すごいな、夏奈子は。この前までは近づいただけで怖がっていたのに……。君はすごい子だよ。君はもつと成長できると思う。これからも俺と みんなと卓球を練習していこう！」

「……はい！」

初めて夏奈子が本気的笑顔を見せてくれた気がする。仲良くなれたのだろうか。

この後はみんなと合流して色々なアトラクションを楽しんだ。これで、女子卓球部みんなとの絆が深められたと思う。これで、大会に向けていっぱい練習できる！

みんなで、女子卓球部を存続させていこう。

第8話「石黒栞（悲劇）」

今日は最初に体育館の半面を5周からのスタートだ。みんな元気よく走っている。卓球だつて、他のスポーツと同じくらい体力はいるからな。ちゃんと体力つけるための運動をさせないと。

「はあ……はあ……」

一番辛そうなのが、夏奈子か。

「頑張れ夏奈子！ あと一周だ！」

五人走り終わり、その後夏奈子が走り終わる。

「頑張ったね！ かなちゃん！」

「う、うん！」

栞の言葉で夏奈子は嬉しそうにしている。やっぱりいいな、友情つてやつは。

「それじゃー、みんな！ 五分だけ休憩だ！」

「五分だけかあ。でも休憩だあ！」

「やつほーい！」

双子揃つて元気そうだ。

いや、みんな元気だ。美雪も、栞も、夏奈子も、葵も。なんか、やつと卓球部らしくなってきた感じがする。最初はばらばらだったけど、やつと揃うことができた！ 俺は猛烈に嬉しい。このまま団結力が深まっていけばいいと思う。そして、夏季大会で一勝以上の成果を収めることができれば、この女子卓球部も存続できる！
あと二カ月。勝つために頑張つていかないとな。

次はラリーの練習だ。それぞれラケットを持って二チームに分かれた。前と同じメンバーでやることにしたけれど……まあいいか。

「……ごめん、なさい」

え？ 栞？ 栞が荷物を持って外に出て行ってしまった。卓球台

のそばにはラケットが落ちている。

「どうしたんだ、いつたい……」

俺が美雪に尋ねるとただ首を横に振るだけだった。

「わかりません……なんか突然あんな感じになって……」

「そうか……」

栞。どうして放棄したんだ。

「……俺、栞を追いかけてく！ 今日の部活は美雪に任せていいか？」

「任せてください！」

「よし！ さんきゅ！」

俺は荷物を持って栞を追いかけることにした。カバンを持っていったから、体操服の姿でそのまま帰るつもりだろう。俺は一気に校門を直指して走る。

どこ行っただ。……バス停。あ！ いた！ 今バスに乗り込むつもりか！ 俺は栞と話さなきゃいけないのに、ここで逃がしたら負けだ！

……乗れたあ。

「な、なんで清水さんが……ここに？」

「栞を、追いかけてきた」

「どうして……ですか？」

栞は俺に怪訝そうに聞いてきた。そんなの決まっている。

「君がいないとダメだからだよ！」

「え、ええっ!？」

なんでそんなに驚いたんだ？ いや、そんなことはない。

「だから、どうして部活を途中で抜けたのか教えてほしい。俺はコーチだ。栞のこと、ちゃんと知っておかないといけない」

「わ……私の……?」

栞はうろたえている。でも聞かないといけないんだ。なぜなのか

を……。

「少し長くなるかもですけど、いいですか？」

「ああ……」

長くなる、か。今までのことも過去の出来事のせいなのだろうか。とても知りたい。

バスの一番後ろの席に二人で座り、栞の話に耳を傾けることにした。

「私、小学校くらいから卓球をやり始めてたんです」

「へえ、そうなのか」

栞はうなずいた。そして続ける。

「卓球が大好きで大好きでたまりませんでした。毎日毎日、ペンホルダーのラケットを握って練習していました。でも私は他の人とは違う気がしてきたんです」

「他の人とは、違う？」

俺は首をかしげる。栞の寂しげな表情を見て、俺はこれから話すことは辛いことなんだなと思った。

「あまり卓球経験のない友達と私は卓球をしてました。でも、友達と卓球をやる回数が減ってきたんです」

話すのが辛そうな顔してるのに、無理に話そうとして……。俺が我が儘を言ったのがいけないんだろうけど。

「友達は私を嫌うようになりました。私の卓球が強すぎる。女の子じゃないみたい。私ばかりにピン球を当ててくる。痛いからやめて。そんな声をいっぱい浴びせられて……。いじめまでに発展しました。学校に持って行っていたラケットも壊されたりと、散々でした」

それは、ひどいな……。

「だから、私はもつと普通の、ただの女の子を演じようと思いました。卓球をしないと決めていました。そして何年か過ぎて、卒業しました。私はいじめに耐えきって、みんなとは違う中学校に来ました。」

今の姫原女子中学校です。ここなら、大丈夫だろうと安心していました。友達も何人かできて私は幸せでした。嘘の自分を作り上げたから、できた友達です。もう、卓球やつてもこんな感じのままだろうと思っていたら……」

「二日目にあつた部活動開始の時か……？」

「凶星だよな。体がビクツとなつてた。栞は泣きそうな目でうなずいた。

「まだ、ホントの自分が残っていて、嫌でした。闇の自分……またいじめが復活すると思って、怖いんです。ラケットもったら豹変なんて……さらにおかしくなっちゃって。私……どうしたら……」

「……」
栞も怖がっているんだ。背けているんだ。自分の好きなことから……。

第9話「石黒栞（覚醒）」

バスは信号で止まっている。栞の話は終わったようだ。栞は俺と同じだ。

「俺も小さい頃から卓球をやってたんだ。でも、いろいろあって…小四くらいで卓球辞めちゃった」

「そうなんですか……」

こっちに目を向けずうつむきっぱなしの栞。

「でも、中学の友達と卓球をしていて気付いたんだ。俺の卓球は他人のことで終わらせちゃいけないって。自分の好きなものは他人に何言われようが続けたって、悪いことじゃない。言われて、塞ぎこんでても、何も始まらないぞ。いじめはいけないことだ。栞は悪くない。でも、卓球が好きならやめることなんかない。やるかやらないかはお前が決めるんだ。他人じゃない！」

「……」

栞は涙を流す。

「それと、お前は自分で壁を作って恐れている。本当の自分に。逃げちゃだめだ。本当の自分と向き合わなくちゃ。本当の自分で勝負していくんだ！」

「でも……みんなに……嫌われ、る……」

まだ折れてる。分かってもらわないといけない！

「じゃあ聞こうじゃないか。俺と女子卓球部のみんなは栞の本当の性格を見ているぞ。でも、今までと同じように接しているだろ？ 違うか？」

「それは……」

困惑の表情をしている栞。

「遊園地の時はどうだ。みんな栞を引っ張りまわして楽しく遊んでたじゃないか。嫌ってるならほったらかしにしてるんじゃないか？」

「みんな……一回しか見てないから……」

「忘れてるって言うのか？　だが、俺は覚えているぞ。本当の栞の卓球を。あまり上手くは無かったが、楽しそうにやっていた。今の君は卓球になると、今みたいな悩んだ顔をしている。本当の栞は卓球がしたいんだ。恐れることなんか何もない。ただ、君は卓球部のみんなに力を貸せる。俺は確信している」

「……………」
栞は黙ったままだ。なら仕方ない。

「……………降ります！……………行くぞ、栞」

「……………え？」

バスから降りる。ちょうど市民体育館を通ったからだ。

「今から卓球をやるぞ」

誰も卓球をしていない。平日だからか。とりあえず台を出す。

「……………」

栞は黙ってネットの準備をしてくれた。

さつさと準備を終わらせて、俺はシューズを履く。栞もシューズを履いた。

「さあ、ラケットを握るんだ」

「……………」

「怖いのか？」

栞は小さくうなずく。まだわかってきてくれない。

「栞！　お前は……………卓球をやりたいからあの部活に入ったんだろう？」

「……………」

「……………早く卓球やるうぜ。……………俺がお前を嫌っていると思っているのか？」

「……………え？」

栞は顔をあげて反応する。

「俺は君が楽しく卓球をやっているとところを見たい。今なら誰もいな

いだろう。仮にもいじめてくるやつらはいない。俺は本当の君を嫌っていい。むしろ大好きだ。僕は、本当の君が大好きだ！」

栞は涙目になり、大粒の涙を流す。

「……ありがとう、うござい、まず……えっぐ……」

手でこしこしと涙を拭う栞はなんだかかわいらしい。打ち解けたみたいで良かった。

「わだし……他人に大好きって……うう……いわれたの……はじめで……」

俺は栞に近づき頭を撫でてやる。

「俺は女子卓球部のコーチだ。偏見なんて気持ちは持たない。みんな大好きさ。支えになる」

「ううう……」

「もつと心に余裕持つてさ！ さあ、卓球やるうぜ！ はやく栞の本当の卓球を見てみたい」

「は、はい……」

栞は涙で濡れた手でラケットを握る。

「じゃあ……いきますよ！」

「ああ、来い！」

もう目つきが違う。ものすごい集中力を感じさせられる。栞も美雪と一緒に。めちゃくちゃ強くなるはずだ！ そう思える。

きれいなサーブ、ツツキ、ネットスレスレを越える下回転のピン球。すごい。この前とは全く違う。なんだろうこのわくわくさせられる感情は。シングルスで大会に出ているような感覚！ ずっとしていたような勝負！ 華麗なレシーブ。きれいにピン球をこするように放つ強力なドライブ。かっこいいと思える。美雪と実践練習で、一セット先取でもいいから試合をさせてみたい！

「栞……君はすごいよ！ 君が本当の自分に目覚めれたから見れた君の実力だ！ すっげえ興奮するよ！」

「あ、ありがとうございます！」

コーチやれてよかったってすごく思える。なんだよここの卓球部。

可能性を秘めた子たちばかりじゃないか！ この卓球部の女子中学生はすげえ！ もしかしたら、夏季だけじゃなく、地区、県、全国までいけるんじゃないのか！？

これはすごく期待ができる！ わくわくが止まらないぜ！ 残り二カ月。卓球部の成長が楽しみだ！

翌日。

「昨日はすみませんでした！ 今日から頑張りますのでこれからもよろしく願います！」

ぺこりと頭を下げて丁寧に栞が挨拶した。

「おかえり！ 栞ちゃん！」

部長の美雪は温かく迎える。

「しおりん帰ってきたあ！ 早くやろうよお！」

「やろうやろう！」

友美と真美もいつも通りだ。

「栞ちゃん、一緒にやろう！」

「うん！」

一番仲がいいと思われる夏奈子も栞の手を引いて卓球台へ向かう。

「まあ、サイテーな人がいなければもつといい部活になりそうだな。どね」

なんか機嫌が悪いのだろうか、葵。絶対俺のことを言ってるよな。

これで、女子卓球部は本当に揃った。もうすぐ六月になる。そろそろ本格的に指導していかないと。この部活なら、やっていけるな。

第10話「謎の手紙」

ついに六月に入った。もう一週間したらコーチになって一カ月になるな。早いなあ。最近はみんな部活に出てくれて、しっかりと練習してくれる。俺はすごく嬉しい。

「あ！ 悠斗さん！」

体育館の扉を開こうとしたら、美雪がやってきた。今来たのか。

「今日もよろしくお願ひします！」

ぺこりと頭を下げる。

「あ、ああ。なんだよ、急に……」

なんだか照れくさい。

「嬉しいんです！ 悠斗さんとみんな卓球をやるのが」

「ははっ！ そうか。俺もさ！」

二人で笑いあっていたら、いきなり体育館の扉が開いた。赤い髪の子とツインテールの子がいる。栞と葵だ。

「なにしてんのよ。はやくやりますよ」

「ああ、そうだな」

待たせたからちよつと不機嫌なんだな、葵は。いつものことだけど。

「あの……悠斗さん」

栞が話しかけてきた。

「なんだい？」

「えつと……なんでも、ないです」

「え？」

栞もなんか不機嫌そうだ。すぐに中の方へ行ってしまった。俺、怒らせてたっけ？

「さあ、今日も五周から始めるぞ！」

「はい！」

友美が元気よく走り出す。みんなも続いて走る。今日もみんな元気だ。一番早いのはやっぱり美雪か。さすが先輩だな。いや、部長と言った方が部活らしく聞こえるかな。夏奈子が少しペースが遅くなってるな。ここは陸上部じゃないから、速さとかはいいんだけど。これは達成感と体力つけるための運動だ。最後まで走りぬいて、集中力などを少しずつ身につけてもらう。

そっぴや、男子卓球部は外周十周ばかりで、いつもへとへとだったな……。俺体力ないからめっちゃつかれてたな。中学生の頃が懐かしい。まだ高校二年の男子だけど、そう思う。圭一郎も頑張ってるってたな。あと、

「さん！ 悠斗さん！」

「……っあ！ ごめん！」

「何ポーっとしてんのよ」

葵に冷たく突っ込まれた。

「ごめん。色々考えてて」

「悩み事なら、いつでも相談してください！」

「え？ ……ああ、ありがと、彗」

「い、いえ……」

中学一年生に心配されてしまった。何考えていたかは黙っておこう。

「五周走ったか？」

俺が聞くとみんな元気よくうなずいた。

「コーチ、ずっとポーっとしてるから、みんな待ってたんだよ？」

真美がそう指摘してきた。

「そ、そうなのか……。すまん。じゃあ次はラリーをやってくれるか」

「はい！」

六人そろってるから、最近は卓球台を三台も出して練習している。毎日メンバーを変えさせて練習する。そうした方が練習になる。

今日は、美雪と真美のペア、夏奈子と葵のペア、栞と友美のペアですることにした。

いつも通りのメニュー　フォアとバックの素振りと、フットワークしながらの素振り。その後にフォアのラリー、バックのラリーをやる。その後休憩を入れて、次はツツキのフォアとバックの練習。その後はレシーブ練習などを入れてある。疲れるだろうけど、最低限のことは練習しないと、一カ月ちよつとにせまっている夏季大会にでる選手たちに対抗できないかもしれない。できるかぎり練習しないとな。

「さあ、休憩だ！」

「わーい休憩だあ！」

いつも通り双子さん方は喜んで水筒がある方に向かって走る。元気はまだあるならよろしい。さて、俺も立ちっぱなしだし、座って休憩するか。……ん？　カバンに紙が乗ってる。いつの間だろう。誰かのいたずらか？　暑いからって、体育館のドアを開けてたし、こっそり誰か入ってこんな紙を残したのだろう。折ってあるから俺は広げて見た……！

「な、なんだよ……これ……」

いたずらにしてはちよつとな……。殴り書きで『早くこの女子卓球部をやめなければ怪我をすることになるぞ』と書いてある。怪我？　そんなバカな。俺はそんなんでつられたりしないさ。

「何ですか、それは……」

美雪！？　わ！　おい、紙を勝手に取るなよ……。

「えつと……ええつ！　これは……きよ、脅迫状！？」

「おい！　声がでかいって……」

みんな寄ってきたじゃないか。

「こんなのいたずらに決まってるじゃない」

葵が冷静に言う。ああ、これは完璧ないたずらだ。

「P・Sって書いてありますよ……？　読みづらいですけど」

夏奈子が文の下の方を見て言った。書いてあったっけ？　よく見て

なかった。殴り書きだしな……　気付かなくてもおかしくないよな。

「なにになに……　『雨の日、ずっと待っているぞ』？　どういうこと
でしょう？」

雨の……　日？　何か引つかかる……。俺は何か……　忘れている？

「……ぐっ」

頭痛だ。なぜか急に頭が……。

「大丈夫ですか!？」

栞が近寄ってくる。みんなも心配そうに俺の周りに集まる。……

治まってきた。

「……　大丈夫だ。部活、続きやろっぜ」

「でも……」

不安そうな顔をする美雪。

「大丈夫大丈夫。ちよつと頭痛になっただけだつて。さあ準備しろ

ー！」

「は、はい」

みんな乗り気じゃなくなっちゃったな。悪いな……。俺、どうしたんだろっか。何か忘れてることがあったか？

……　まあいいか。みんなはツツキ練習に入ってる。調子悪いなら、倒れるわけにはいかないな。この子たちに、一勝でもいいから、夏季大会を勝たせてあげないと……。

第11話「休部処分」

俺の高校の卓球部が休部処分を受けてしまった。原因は先輩が他校と喧嘩してしまい、大会の出場停止及び部活停止処分という、残念なことになってしまった。2学期までは部活動はやれないらしい。非常に悔しい。

「残念だったなあ」

圭一郎が嘆く。

「ホントに残念だよ。大会は楽しみだったのに……」

「そうだな。なんで喧嘩とか乱暴なことしたんだろうなあ」

「さあな……」

俺は靴を履いて門に向かう。

「それじゃあまたな、圭一郎」

「お、おい……」

「なんだ？」

圭一郎に呼び止められた。早く姫原女子中学の部活動へ向かわないといけないってのに。

「お前っていつもどこ行くこうとしてんだ？」

「え！？ えっと……」

言えない。女子たちに 中学生に卓球を教えることなんか。

どうごまかそうか……。

「ちょ、ちょっと自主トレ……かな」

「かなって、お前なあ」

圭一郎は呆れたように俺に言ってきた。まあ、俺だってそう言うだろうけど。圭一郎の立場から見たらな。

「そ、そういうわけじゃあな！」

「お、おい……」

こんなところでずっと捕まっていたら埒があかない。走って門まで行く　が、門のところでは何者かに腕を掴まれ、動きを止められた。「誰だ!？」……って、梨香か」

梨香が俺の腕に抱きついてきてる。なんだよ、急いでるときに……。

「いつもどこに行くのよ?」

めっちゃ怪しまれてる。

「ど、どこだっついていいだろ! それじゃあな!」

行こうとしたら、次は足をひっかけられた。不覚にもこけた。

「痛ってーな!」

「いいなさい! どこに行くのよ!」

なんか相当怒ってる。どうするか……。

「……お、おい! あれを見るよ!」

「ふえ?」

指差した方向を梨香は見た。今だ!

「あ! しまった!」

高校生で引つかかるやつもいるんだな。引っかけられてこけた俺が言えることじゃないけどさ。

「休部しちゃったんですか!??」

「ああ」

部活終了後、たまたま美雪と一緒に帰ってる俺は休部処分を受けたことを話した。

「部活……停止ですか……」

美雪はうつむく。この女子卓球部は休部程度じゃすまないもんな。廃部。阻止するために俺たちは頑張ってる。

「廃部はさせないぞ!」

「え?」

見透かされたのかというような顔をした美雪は啞然としている。

「大丈夫さ。みんな強くなってきたから。このペースでいけば
廃部になつたりしないから。プレッシャーを感じなくていい！」

そう言ったら美雪は少し微笑んでくれた。

「ありがとうございます。私、頑張りたいです」

「ああ、応援してる」

「は、はい」

美雪が顔を赤くしている。照れてるところ初めて見た気がする。

「あ、あの……」

「ん？」

「手、っ、繋いでもいいですか？ 途中まで！」

「いいけど、どうして？」

「え、えっと……元気をもらうためです！」

「そっか。じゃあ、はい」

俺は美雪の左手を握ってあげた。柔らかい感覚がある。

「ありがとうございます……」

「お、おう」

なんか、照れくさくなってきた。美雪もうつむいて顔を合わせよ
うとしないし。……まあいつか。

夕日が地平線へと隠れていく。俺と美雪はその地平線へと向かい
歩いてゆく。

休部しちゃったけど、美雪たちの部活は行くことができる。六人
みんな強くなれる。絶対に。夏季大会は絶対に負けられない。

第12話「ランニング！」

土曜日。なんにもすることがないから走るとするか。ランニング用のシューズを履いて俺は外に出る。いい天気だ。でもまだ少し暗いな。当たり前だ。今は早朝の六時だ。六月だが少し肌寒い。

今日は家からスタートして、少し離れた公園まで行って、そこから往復して来るか。だいたい二十kmくらいは走れていると思う。

七時過ぎに帰って来ることは……難しいな。まあコンビニでなんか買つか。最近買ったTシャツを着て準備運動をして……。十分にやれたな、じゃあ行くか。

結構走った気がするが……そろそろ七kmは走れたくらいだろうか。けっこう疲れるな……。ちょっと休憩するか。そこにあるベンチに腰をかけよう。……あれ？ そのこのベンチに見覚えがある子が真美だ！ こちら辺に住んでるのかな？ ていうか、汗だくじゃないか！

「真美！」

「ん？ あれ！ コーチ！」

真美は驚いたような顔をしている。俺も驚いてるけどな。

「どうしてここに？ その格好は、ランニングでもしてたのか？」

「そだよ！ 体力を上げるために最近土曜日に走ってるようにしてるんだ！」

「そうなのか」

感心するなあ。偉い。あれ？ そういや、友美の姿がない……。

「友美は一緒に走っていないのか？」

「友美？ あー、まだ寝てるよー」

友美らしいな。友美ってマイペースみたいな感じだしな。真美もだけど。もうすぐ七時だから起きてくるくらいか？ 私生活は知ら

ないけど。じゃあ一人つてわけか。それなら……。

「一緒に走るか？」

「え？ いいの？」

「ああ、さあ行くござい！」

「うん！」

まだ元気っぽいな。真美の体は汗で濡れているようだ。真美の黄色の服は汗でかなり染みているのが分かる。首にかけているピンクのタオルで真美は自分の顔と首周りを拭う。それと、服の中にまでタオルを入れて汗を拭っている。……って俺が目の中にいるってのに！……まじまじ見ていたら……いけないよな。いきなりすぎて目線がそこにいつて……。

「……別にコーチに見られてても良かったけどね」

「え、ええっ！」

見てしまったのがバレてる。いや、俺の目線を見たらそりゃ分かるか。嫌な風に見られてしまったかな……。

「じょーだんだよ！ 本気にした？」

「い、いや、ちよつと驚いただけさ」

ウソです。ちよつと信じました。

「さあ、走ろっ！」

真美はいきなりダッシュを始めた。

「ま、待てよ！」

真美のやつ。結構速いな。一緒に走るのは初めてだ。いつも体育館で走っている所を見て、速い方とは知ってたけど、なかなか速い……。負けてられないな。

「すごいな、真美！」

「へへっ！ 小学校の時は、マラソン大会は学年で一位だったんだ！」

マジかよ！ そりゃ、そりゃ、友美がこの前言ってたな。真美は色々できるのか。そりゃ、そりゃ、そういう結果出されたら、気にしちゃうよな。双子なのに実力の差が違っってことが。

「さあ、置いて、きゃっ！」

真美から女の子らしい声が聞こえたかと思っただら、さっきまで見ていた真美の姿が視界の下の方へいく。ばたつと真美は倒れた。つまり置いてこえちまったのか。

「大丈夫か!？」

「痛ったーい！」

真美はしゃがみこんで足を押えてる。怪我をしたのか。涙目になつてる。右膝を怪我してるようだ。血が出ている。あれ、右腕もすりむいてるじゃないか。

「とりあえず……傷口を水で洗おう」

「う、うん」

かわいいな。涙目でうなずく女の子は……。って何思ってたんだ俺は！ そんなことじゃない！ お、ちよつどいいところに公園が。この前葵と逃げてきたところじゃないか、ここ。ここら辺まで走って来たのか、俺。

とりあえず公園に入り、水道で真美の膝と腕についた土を洗い流す。

「痛い……」

「我慢我慢」

よし、泥は落とせた。次は消毒してやるか。怪我をした時用に俺はランニング中には消毒用の薬を持ってきている。そんな機会はいままでなかったけどな。

真美をベンチに座らせて、膝を出してもらつ。消毒液を傷口に付ける。

「うう……」

「ちよつと染みるだろうけど、我慢な」

「うん」

付けてあげた後、たれてきた部分をハンカチで拭いてやる。次は腕に付けて同じようなことをする。その後、包帯を巻いてやった。

「ありがとう」

「気にするなつて！ 今日には家に帰った方がいいぞ。無理はいけな
いからな」

「分かった！ コーチが用意周到で助かったよー！」

「はは、このウエストバッグは色々入るからな。結構気に入ってる
んだ」

俺は自分の緑色のウエストバッグをポンとたたく。

「あはは！ コーチっておもしろいね！」

「え？ そ、そうかな」

朝日に照らされた真美の笑顔はとても美しく見えた。なんかドキ
ドキしてしまった。

「……おぶつてごうか？ 歩き辛いだろ？」

「でも、真美は重いよ？」

「いいよいいよ、気にすんなつて！ 俺は結構力あるからさ！」

「おー！ 頼もしいー！」

真美が胸の前で手を組む。俺はしゃがんで真美に乗るようと促
した。おぶつてみたけれど、軽いじゃないか。このまま真美に案内
してもらいながら家に向かおう。

こうして家の前まで真美を送って行った。……いつの間にか八時
過ぎてしまっている。腹減ったなあ……。

第13話「純粹」

今日は雨だ。梅雨の時期だからなあ。でも卓球は体育館でするから、雨なんて些事なことだ。でも蒸し暑いや。湿度が一気に上がるからな。六月は。晴れてくると次は外までじめじめした感じの暑さになるから、それは嫌だな。他の事からみたら些事程度じゃないな。「体育館あつーい……雨降ってるのにい」「あつーい……」

弱音を吐いてるのはもちろん真美と友美だ。この二人がこんなこと言うのはなんか慣れてきたな。

「暑い……」

あれ、夏奈子も言ってるよ。とかあ思いながらも俺もここに来たら暑いとは思わなかった訳じゃない。でもそれを乗り越えて練習すれば成長をするんだ、みんな！……という余計なことも言える元気がない。でもこの子たちのために弱ってる姿を見せるわけにはいかない。

「上手くツツツけないじゃない」

「うーん……ちょっと横に動かし過ぎだよ。ボールの下の方をこするように斜め下にラケットをおろすんだ」

「わ、わかつてるわよ」

葵は俺の話を聞いてツツツキの練習をする。ツツツキはピン球の回転を下回転に変える方法だ。これが上手くできないと大会では不利になるだろう。誰でも下回転のサーブスを使ってきたりする。たまに横回転をかけるやつもいるが、そうはいないだろう。それにたった一カ月程度でそんな細かく教えてたら大変だ。やっぱり基本を徹底しないとまず勝てないだろう。しっかりと基本の練習をさせて、その後に実践練習をさせる。大会のルールがすぐにわかるように体

で身につけてもらわないとな。サービスの仕方とかな……。

「うーん。むずかしー！」

「むずいー！」

真美と友美はダブルスの練習もしてもらっている。二人は双子だからと勝手に単純な考えだが、意気が合いそうな二人ならやれると信じてる。

「みんなお疲れ！ 十分間休憩しようか」

みんな疲れ顔だし、休ませてあげないと。それに暑いし。長時間やらせっぱなしは体に悪い。

「せんぱーい！ 友美のラケット見てー！」

「ん？」

友美が近寄ってきて、自分のシェークハンドラケットを見せてきた。

「ラバーを買ったってことか？」

「そだよ！ ラバーは色々種類があって迷ったんだよねえ。粒々があるラバーとかそれがないラバーとか。よく見るとなんかラバーによってスマッシュが強くなったり、回転がすごくなったりとか、回転の効果を受けないとか書いてあってさー。それみて選んできたんだ！」

ほう、自分で選んだのか。自分の金で買ったのかな？ ラバーって結構高いのにな。しかもシェークハンドは表裏にラバーを貼るからその分高いし。

「これは……裏ソフトってことは回転をかけやすくするやつか。確かこのラバーは、回転かかりやすくしてドライブとかも打ちやすいから、初心者にもお勧めのラバーだな」

「へー！ よくわかったね！ そだよ！ そうやって書いてあった！」

俺の方が背が高いために上目使いで見ていた友美は無邪気に喜んでいる。そして友美は踵を返して、

「それじゃあ休憩しまーす！」

と言って、自分のカバンがある方へかけていく。

「栞ちゃんには関係ないでしょ」

「……」

あれ？ 喧嘩？

「……なら勝負してください。私が勝ったら、あきらめてください」

「……分かったわ。私が勝ったらもう文句なんて言ってこないでね」
「分かりました」

喧嘩しているのは、栞と、美雪だった。一体何があったんだ？
こっちにくるんですけど。なんか真剣な表情してる。美雪はこっちをちらつと見た。ちょっぴり顔が赤く見えたような……。なんか話しかけづらい。

美雪と栞が卓球台の前へ行く。このピリピリした感じはなんなんだろうか。怖いんですけど。

四人が俺の横に来た。

「お、おいこれは一体何なんだ？」

「さあ……」

葵はすごく不機嫌そうだ。なんだ？ みんなで喧嘩でもしたのか？

いや、葵はいつもこんな感じか。

「恋の戦いです……」

夏奈子が静かにそうつぶやいた。恋の戦いって……。まさか美雪と栞は好きな男子が一緒に、栞がなんか言って美雪が怒ったのか！
？ と、止めづらい。ここは見守っているほうが正しいのだろうか。……悩む。

「先に二セット取った方が勝ちだからね。栞ちゃんはもう知ってると思うけど、一セットは十一点を先に取った方が獲得できるわ。サーブスは二回づつ。互いに十点取ったらデュースになって、先に二点差つけたほうが一セットを取れるわ。いいわね？」

「はい！」

元気よく返事をした栞は構える。
最初のサービスは、栞からだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3209w/>

卓球少女

2011年9月25日03時11分発行